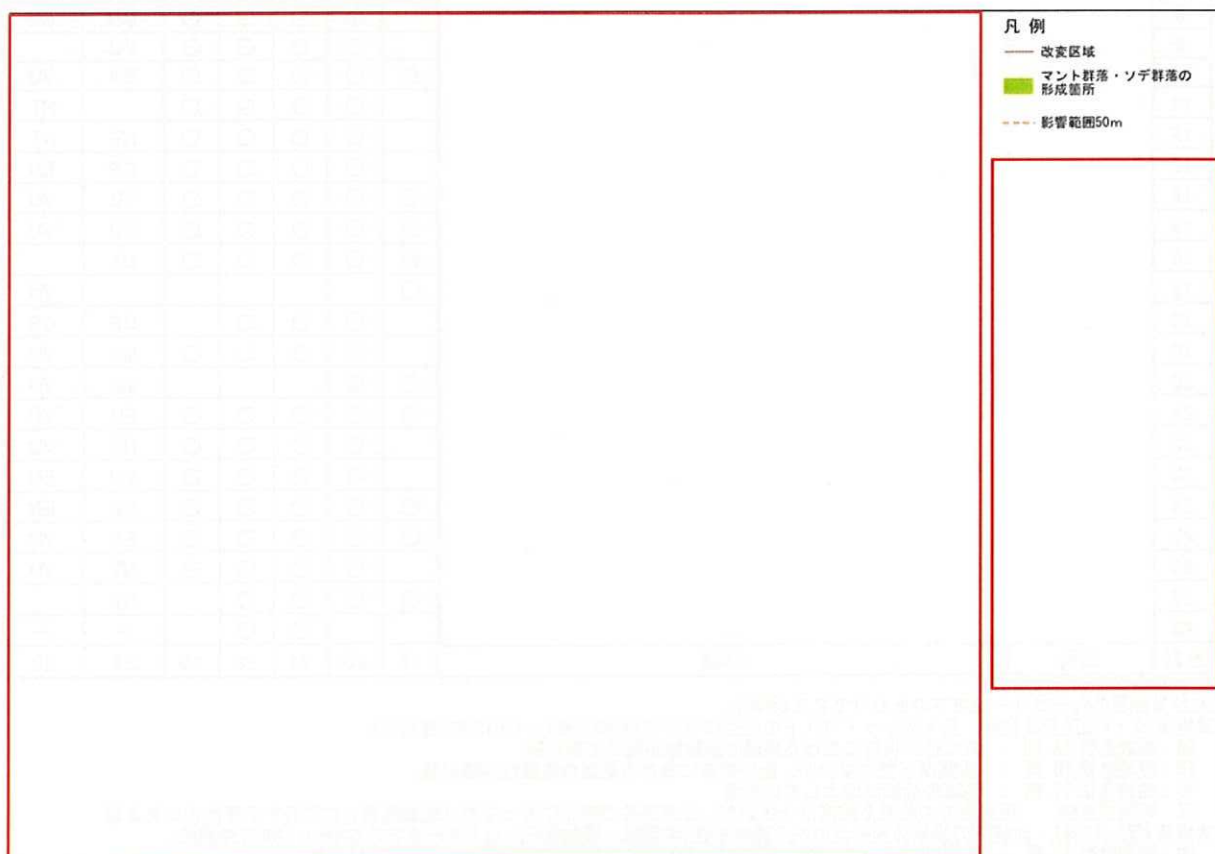


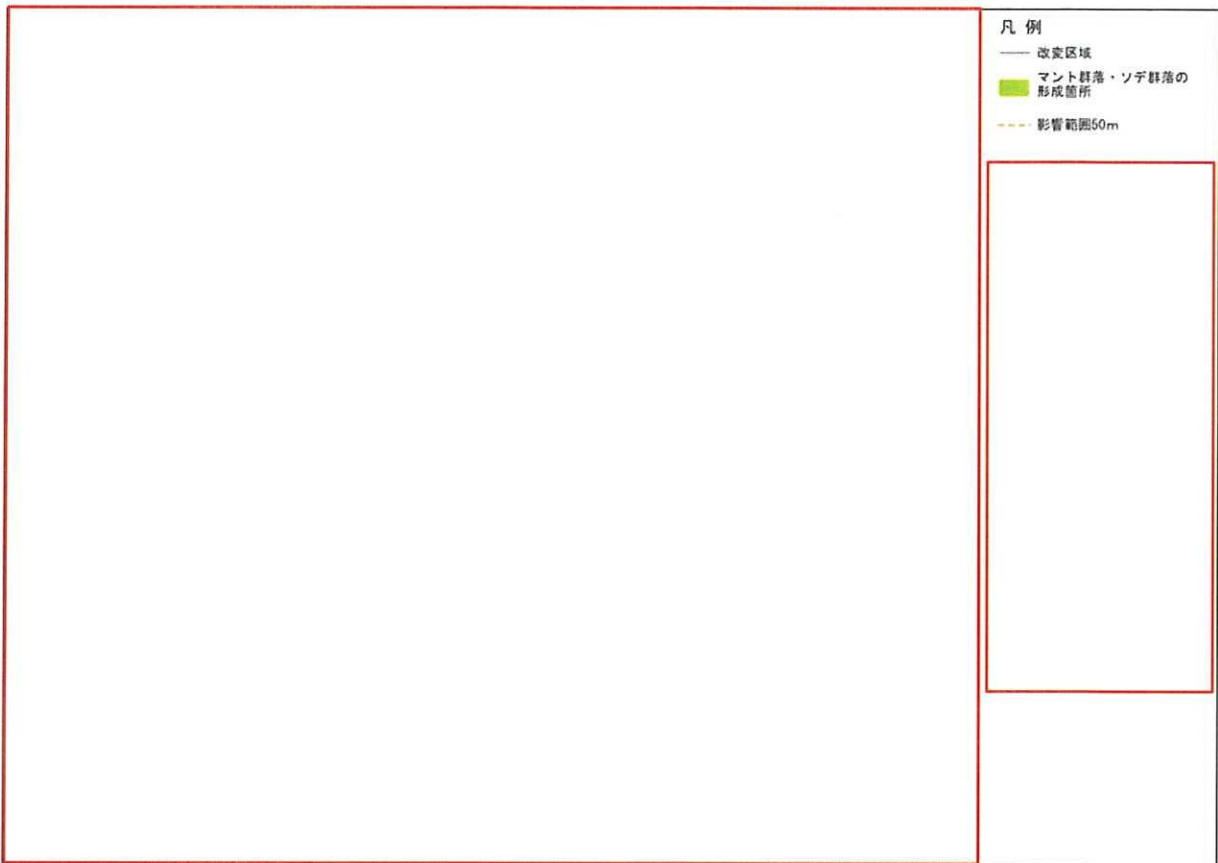
注) 図中の数字は確認株数を示し、1株の表記は省略した。

図 6.2.2-10(1) 影響範囲 50m内で確認した貴重な維管束植物(N-4.1:平成 25 年度春季)



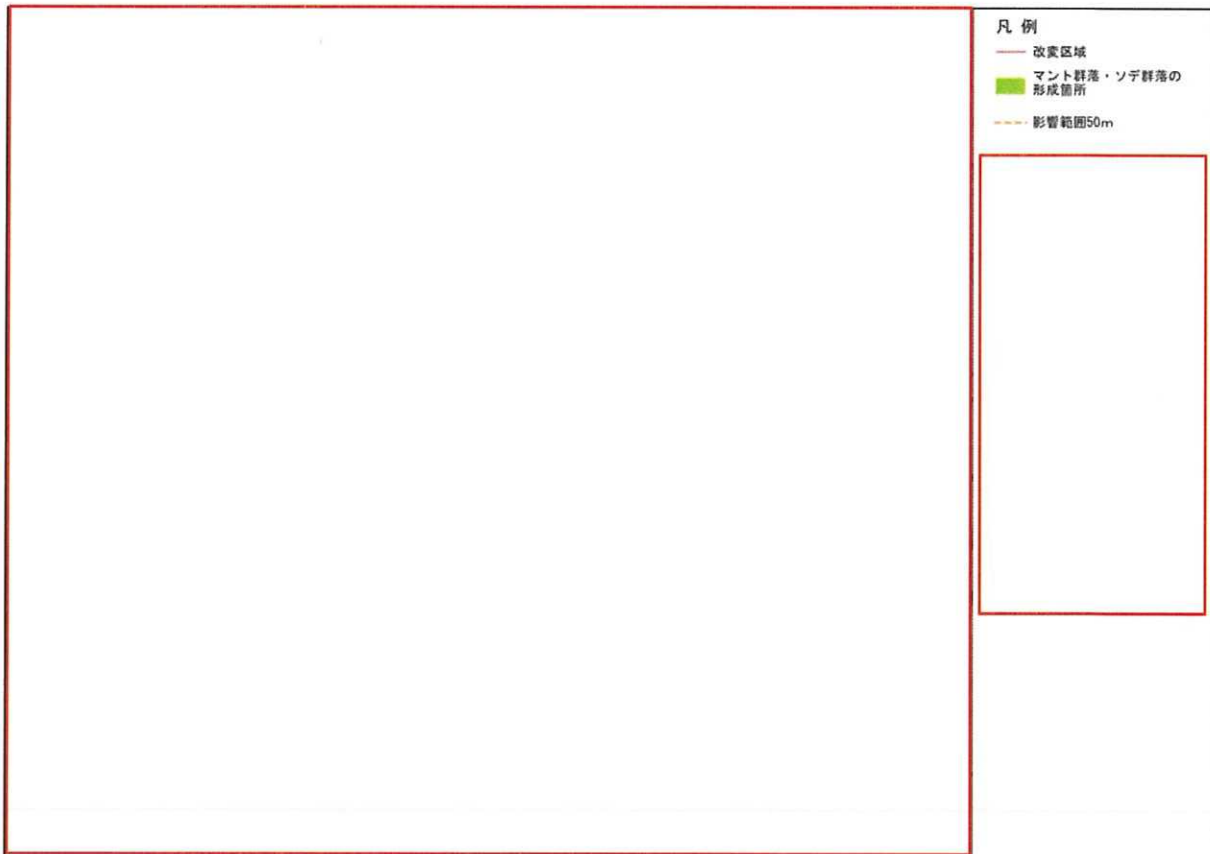
注) 図中の数字は確認株数を示し、1株の表記は省略した。

図 6.2.2-10(2) 影響範囲 50m内で確認した貴重な維管束植物(N-4.1 平成 25 年度夏季)



注) 図中の数字は確認株数を示し、1株の表記は省略した。

図 6.2.2-10(3) 影響範囲 50m内で確認した貴重な維管束植物(N-4.1:平成 25 年度秋季)



注) 図中の数字は確認株数を示し、1株の表記は省略した。

図 6.2.2-10(4) 影響範囲 50m内で確認した貴重な維管束植物(N-4.1:平成 25 年度冬季)

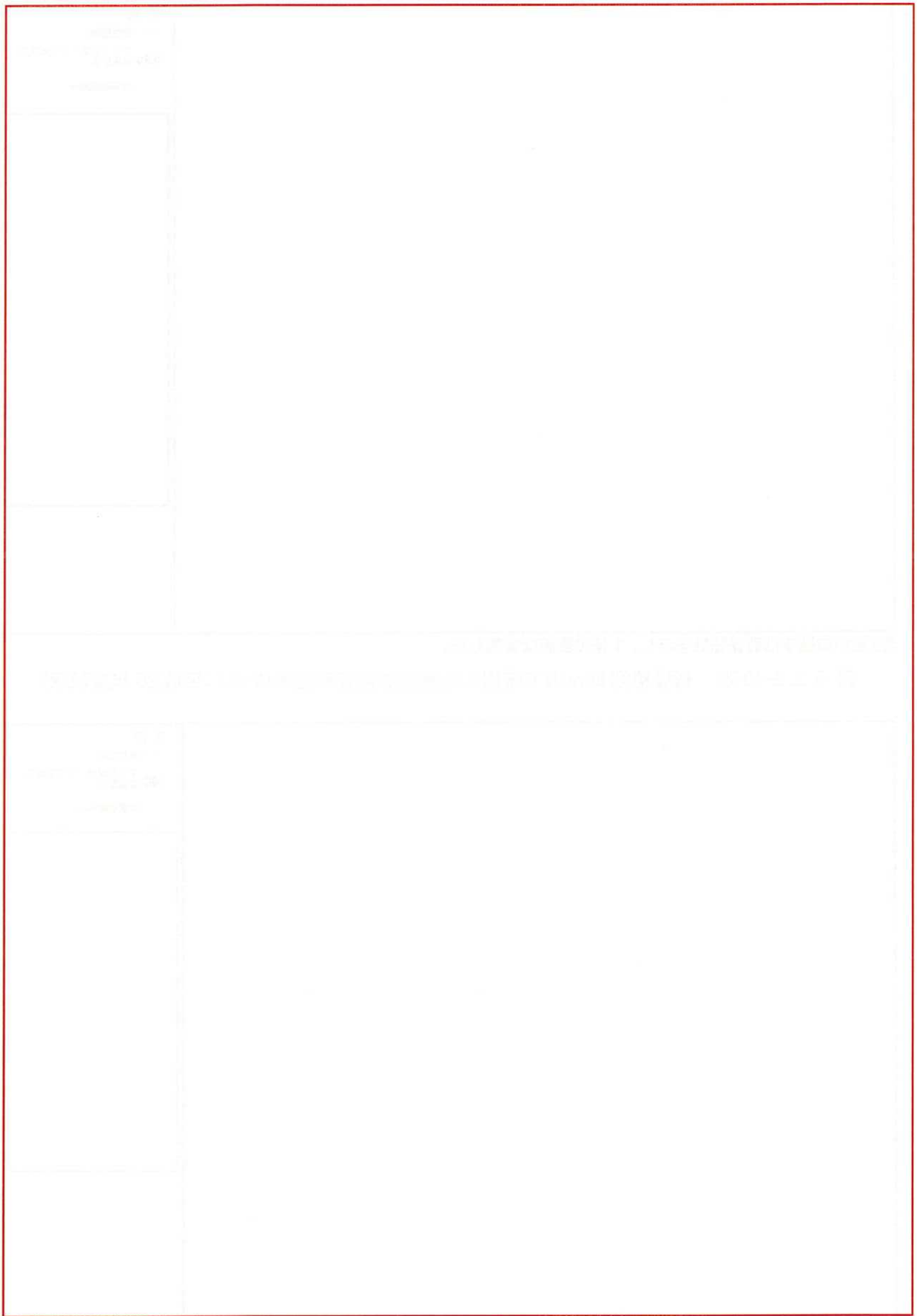


図 6.2.2-11(1) 影響範囲 50m 内で確認された貴重な維管束植物 (N-4.1)

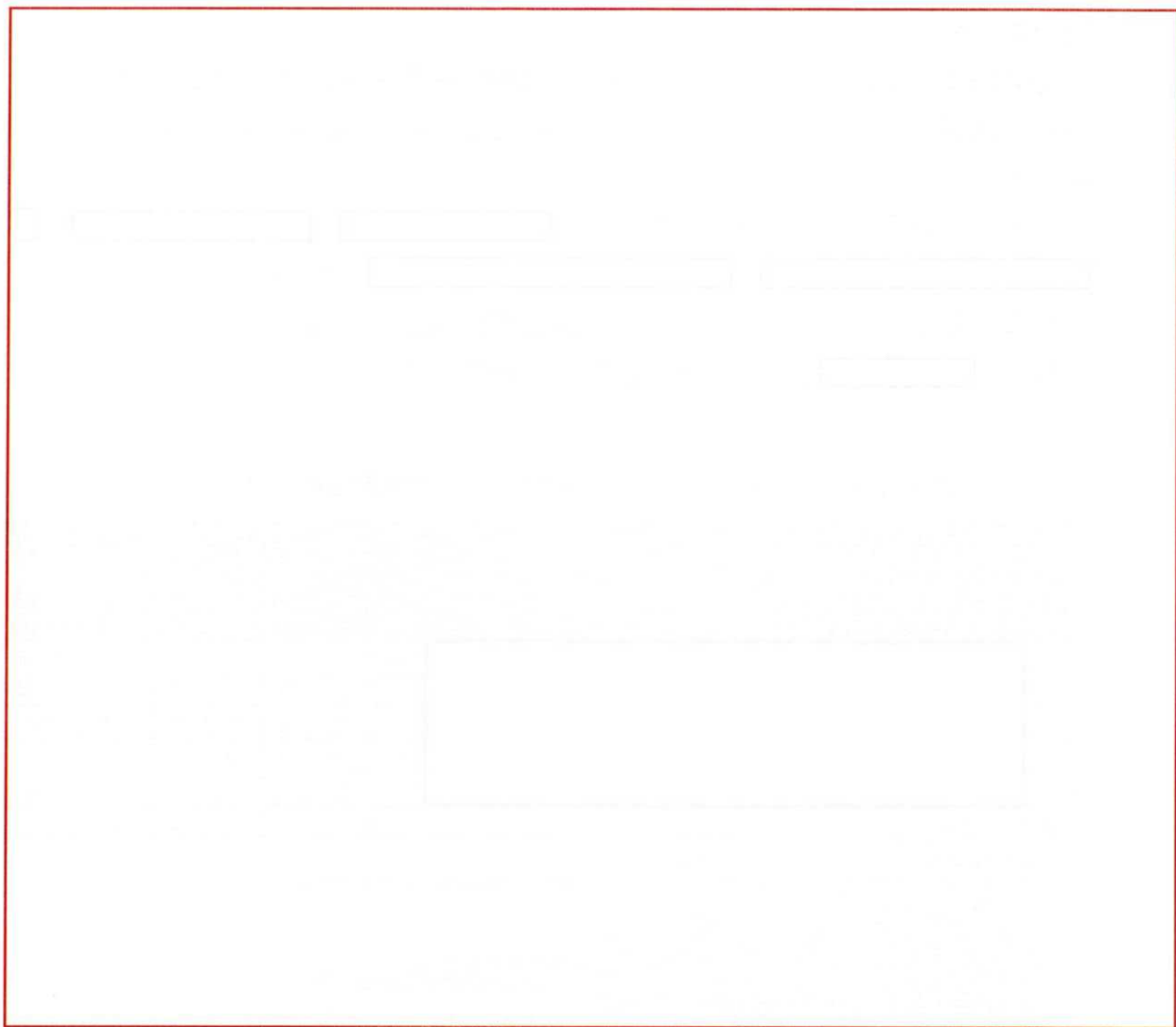
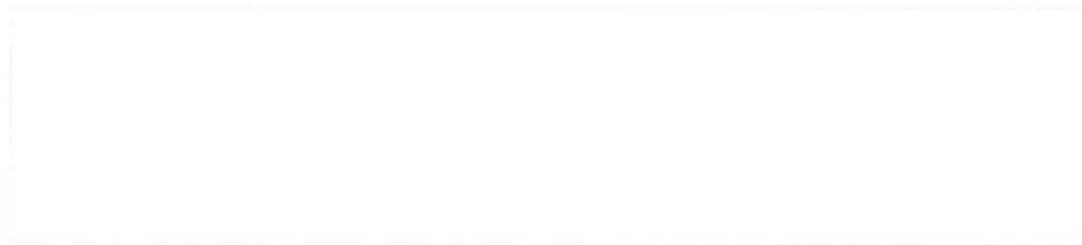


図 6.2.2-11(2) 影響範囲 50m 内で確認された貴重な維管束植物(N-4.1)



b) 蘚苔類

影響範囲 50m 内で確認された貴重な蘚苔類の一覧表を、表 6.2.2-9 に示した。また、確認した蘚苔類の写真を図 6.2.2-12 に示し、確認位置図を図 6.2.2-13 に示した。

N-4.1 で確認された貴重な蘚苔類は、、、
、の計 4 種であった。

なお、評価図書作成時の調査では、影響範囲 50m 内において、3 種が確認されており、以外の 2 種を継続して確認した。

表 6.2.2-9 影響範囲 50m 内で確認された貴重な蘚苔類(N-4.1)

No.	科名	種名	学名	評価 図書	平成25年度				貴重種 ^{注)}	
					春季	夏季	秋季	冬季	環境省 RL 2012	沖縄県 RDB 2006
1				○					CR+EN	CR+EN
2					○	○	○	○		CR+EN
3					○	○	○	○	NT	VU
4				○	○	○	○	○	NT	
5				○	○	○	○	○		VU
合計	5科		5種	3	4	4	4	4	3	4

注)貴重種のカテゴリーは以下のとおりである。
 環境省 RL:「絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト(植物Ⅱ) 蘚苔類」(2012年 環境省編)
 EX:絶滅 : 我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
 EW:野生絶滅 : 飼育・栽培下でのみ存続している種
 CR+EN:絶滅危惧Ⅰ類 : 絶滅の危機に瀕している種
 CR:絶滅危惧ⅠA類 : ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種
 EN:絶滅危惧ⅠB類 : ⅠA類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種
 VU:絶滅危惧Ⅱ類 : 絶滅の危険が増大している種
 NT:準絶滅危惧 : 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種
 DD:情報不足 : 評価するだけの情報が不足している種
 LP:絶滅のおそれのある地域個体群 : 地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅のおそれが高い個体群
 沖縄県 RDB:「改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(菌類編・植物編)-レッドデータおきなわ-」(2006 沖縄県)
 EX:絶滅 : 沖縄県ではすでに絶滅したと考えられる種
 EW:野生絶滅 : 沖縄県では飼育・栽培下でのみ存続している種
 CR+EN:絶滅危惧Ⅰ類 : 沖縄県では絶滅の危機に瀕している種
 CR:絶滅危惧ⅠA類 : 沖縄県では、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
 EN:絶滅危惧ⅠB類 : 沖縄県ではⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
 VU:絶滅危惧Ⅱ類 : 沖縄県では絶滅の危機が増大している種
 NT:準絶滅危惧 : 沖縄県では存続基盤が脆弱な種
 DD:情報不足 : 沖縄県では評価するだけの情報が不足している種
 LP:絶滅のおそれのある地域個体群 : 沖縄県で地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれの高いもの



図 6.2.2-12 影響範囲 50m 内で確認された貴重な蘚苔類(N-4.1:平成 25 年度確認種)



図 6.2.2-13(1) 影響範囲 50m内で確認した貴重な蘚苔類 (N-4.1:平成 25 年度春季)

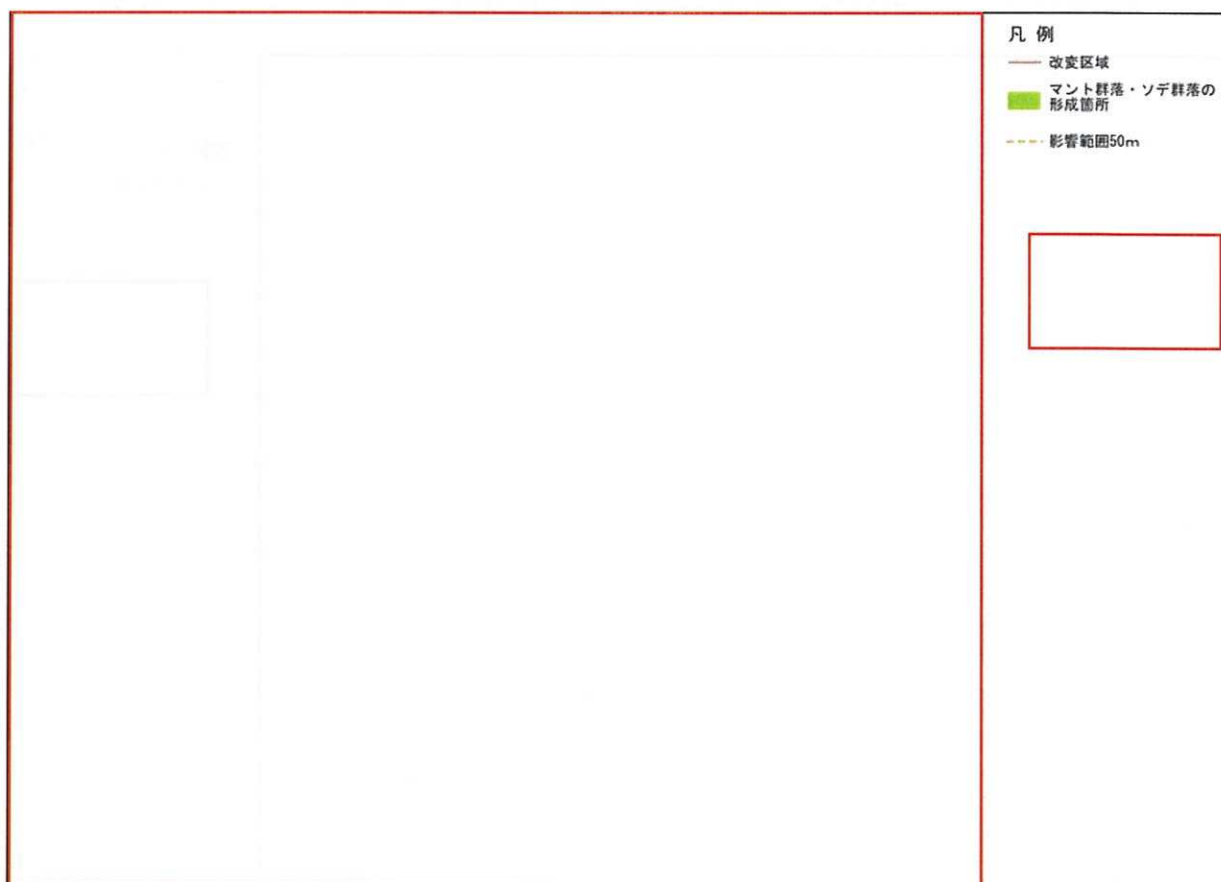


図 6.2.2-13(2) 影響範囲 50m内で確認した貴重な蘚苔類 (N-4.1:平成 25 年度夏季)



図 6.2.2-13(3) 影響範囲 50m内で確認した貴重な蘚苔類(N-4.1:平成 25 年度秋季)



図 6.2.2-13(3) 影響範囲 50m内で確認した貴重な蘚苔類(N-4.1:平成 25 年度冬季)

c) 植生断面図

N-4.1 の南北方向の植生断面図を図 6.2.2-14 に、東西方向の植生断面図を図 6.2.2-15 に示した。

N-4.1 は、尾根部に着陸帯があり、南北方向の無障害物帯の外側には森林環境がみられる。北側は、無障害物帯の近傍にリュウキュウチクが生育するほか、スタジイ-イスノキ群落等がみられる。南側は傾斜地であり、無障害物帯の近傍にリュウキュウマツ等が生育するほか、スタジイ-タイミンタバナ群落やスタジイ-イスノキ群落がみられる。

東西方向は、着陸帯の両側に主に草地が広がっている。東側は、無障害物帯近傍にリュウキュウチク群落がみられ、着陸帯中心から約 70m より外側ではリュウキュウマツ-リュウキュウチク群落となっている。西側は、無障害物帯近傍にリュウキュウマツ-リュウキュウチク群落がみられ、着陸帯中心から約 60m より外側では、チガヤ-ミズスギ群落の草地となっている。

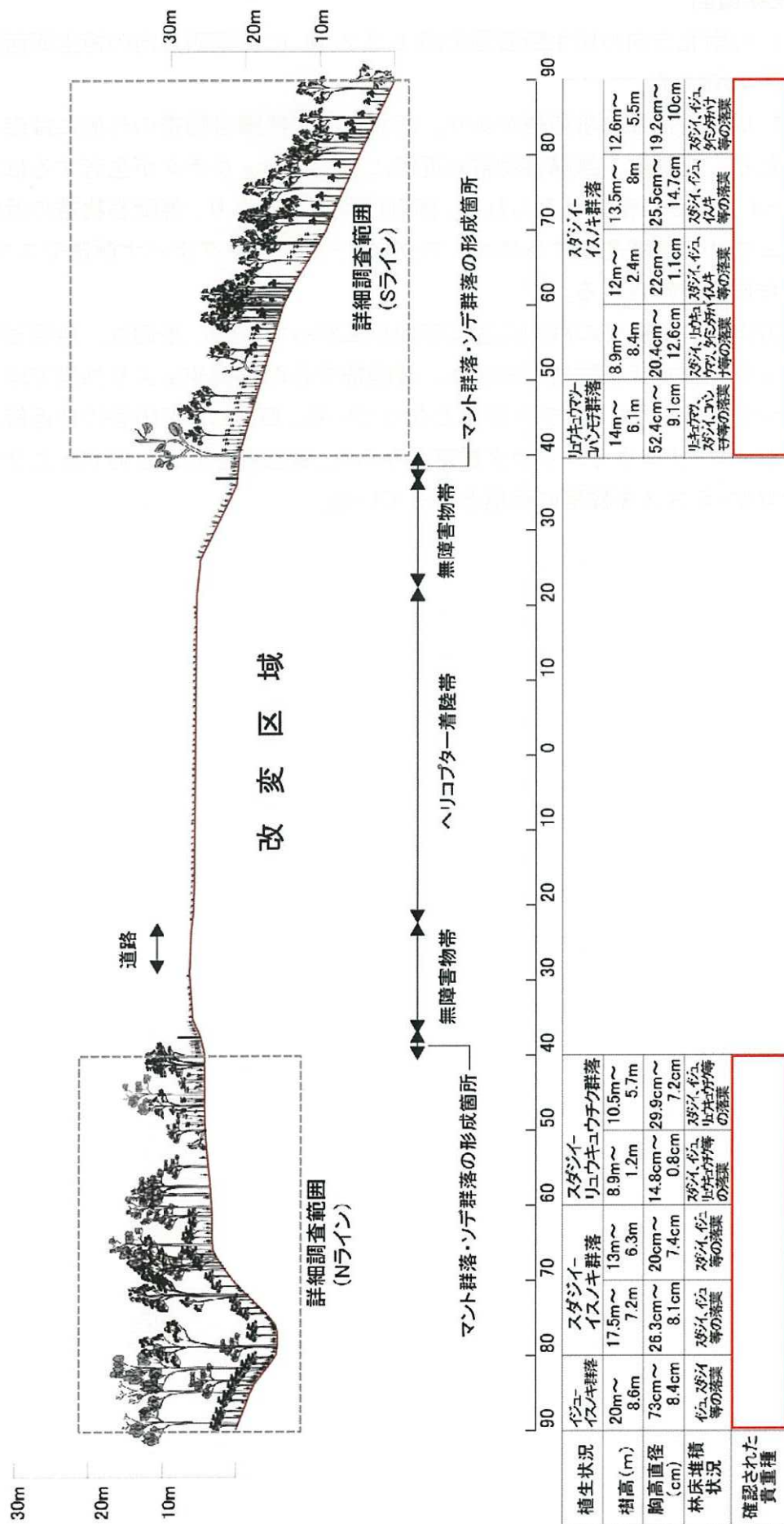


図 6.2-14 (1) 影響範囲 50m 内の植生断面模式図 (北側一南側) : 平成 25 年度春季 (N-4.1)

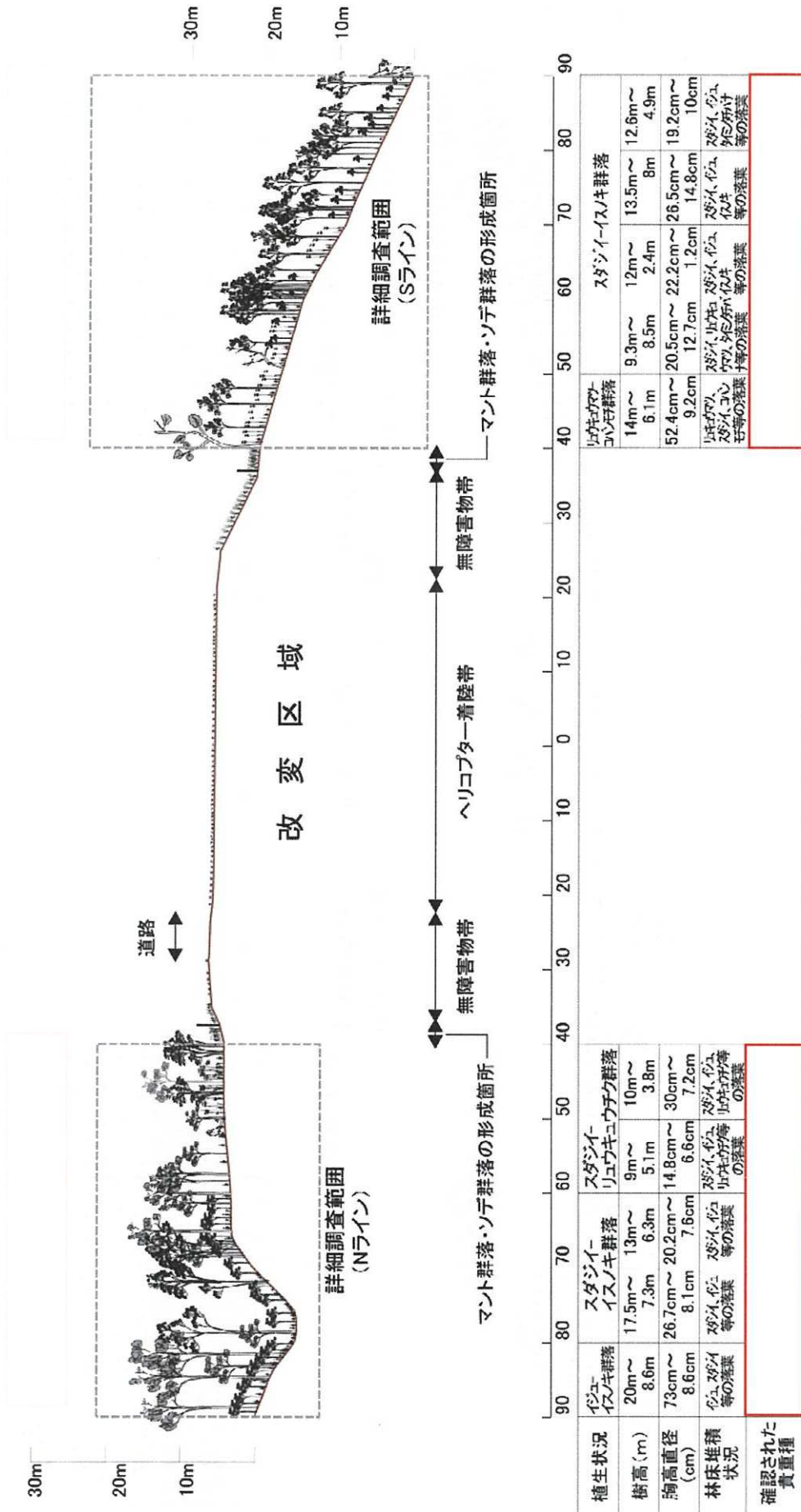


図 6.2.2-14(2) 影響範囲 50m 内の植生断面模式図 (北側-南側) : 平成 25 年度夏季 (N-4.1)

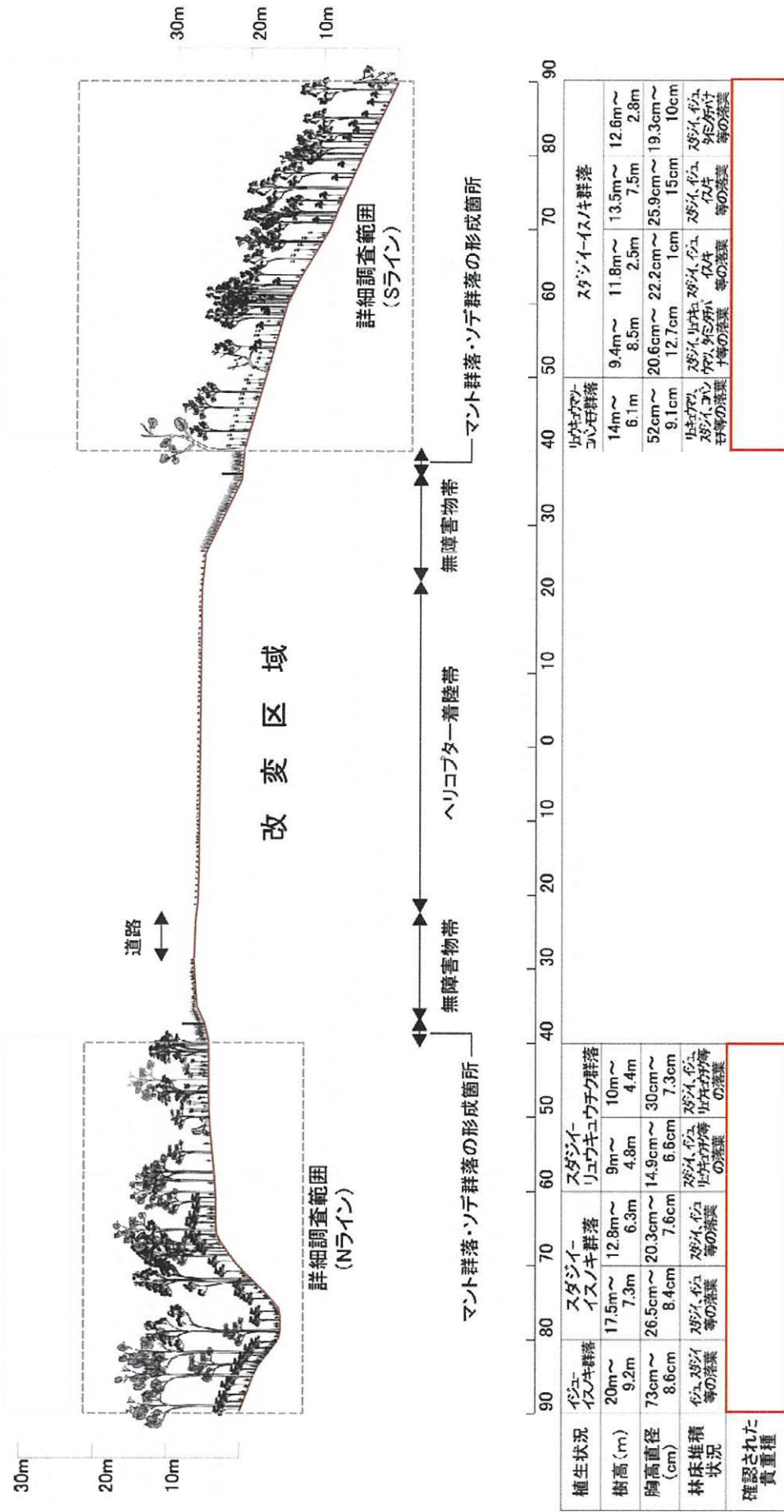


図 6.2.2-14 (4) 影響範囲 50m 内の植生断面模式図(北側一南側) : 平成 25 年度冬季 (N-4.1)

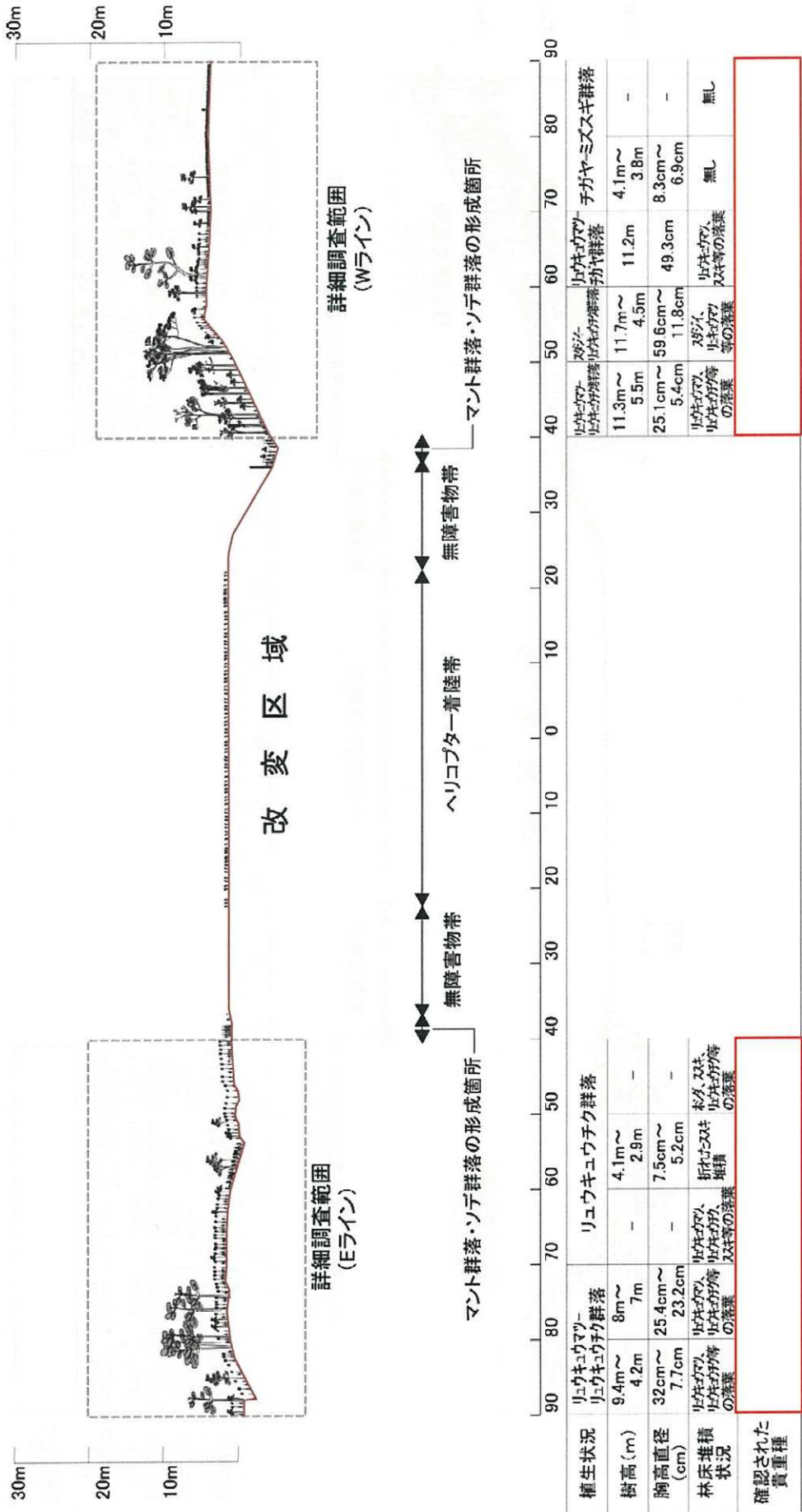


図 6.2-15(1) 影響範囲 50m 内の植生断面模式図(東側一西側)：平成 25 年度春季(N-4.1)

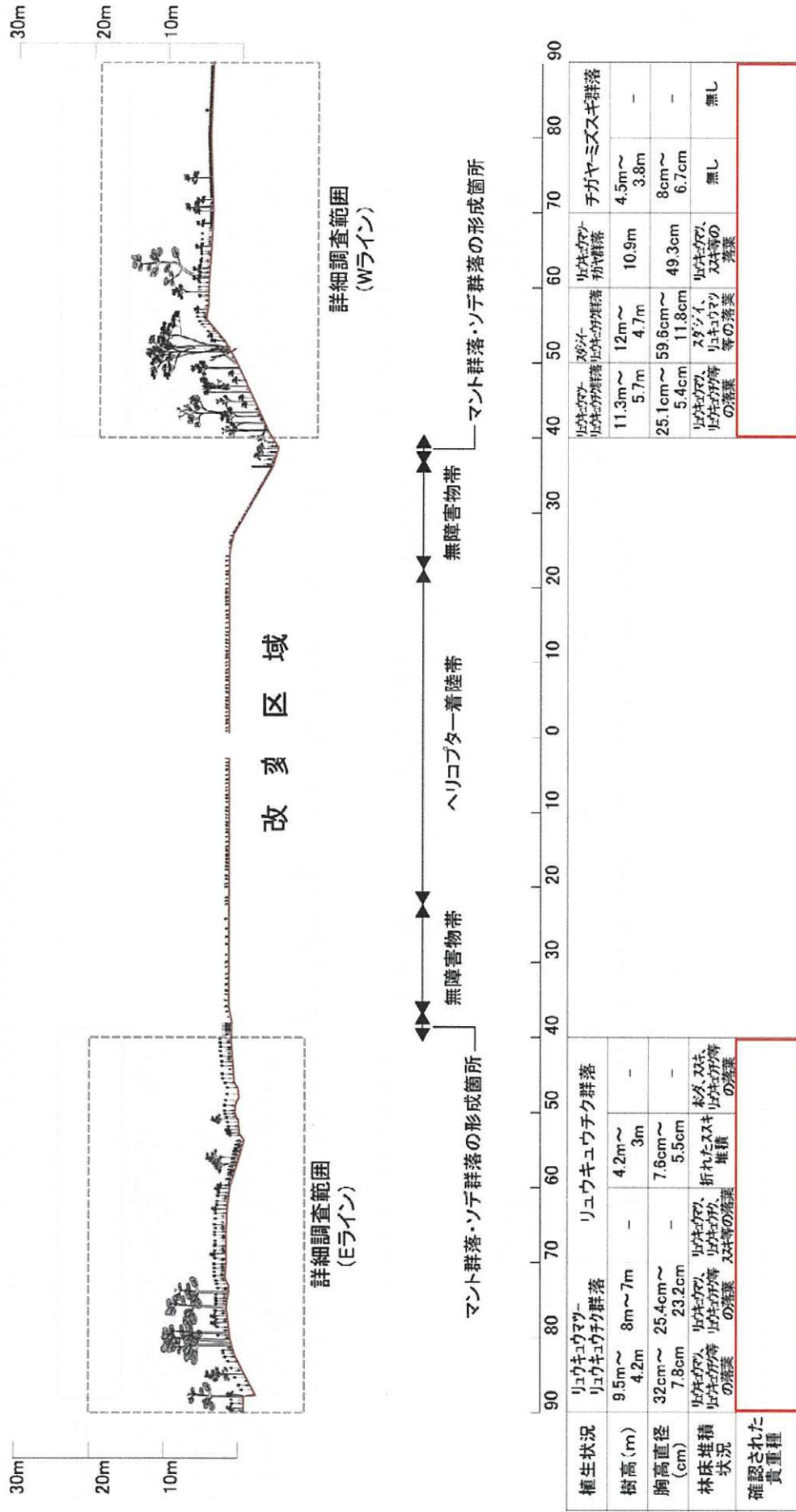


図 6.2.2-15(2) 影響範囲 50m 内の植生断面模式図(東側一西側)：平成 25 年度夏季(N-4.1)

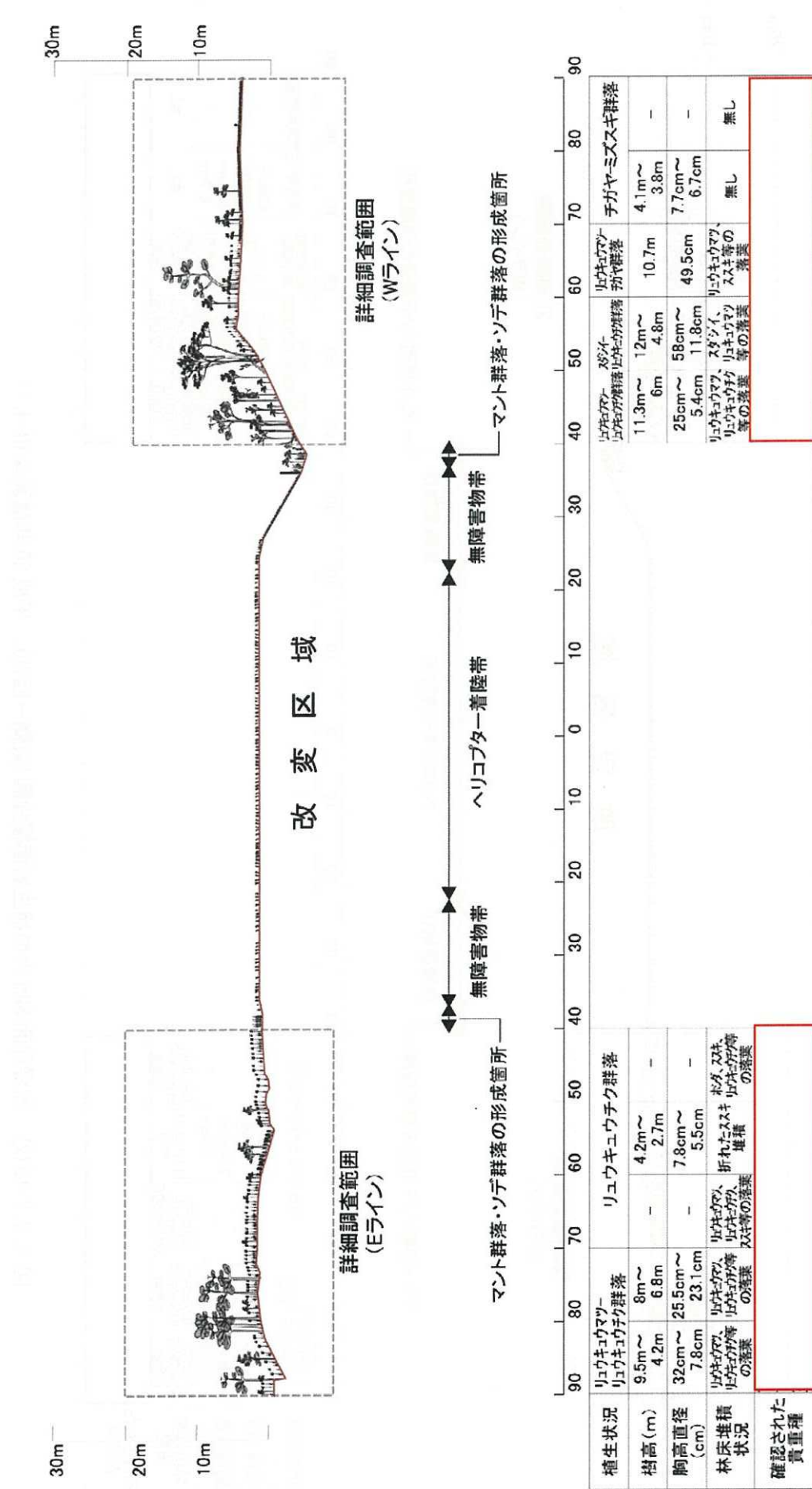


図 6.2.2-15(3) 影響範囲 50m 内の植生断面模式図(東側一西側)：平成 25 年度秋季(N-4.1)

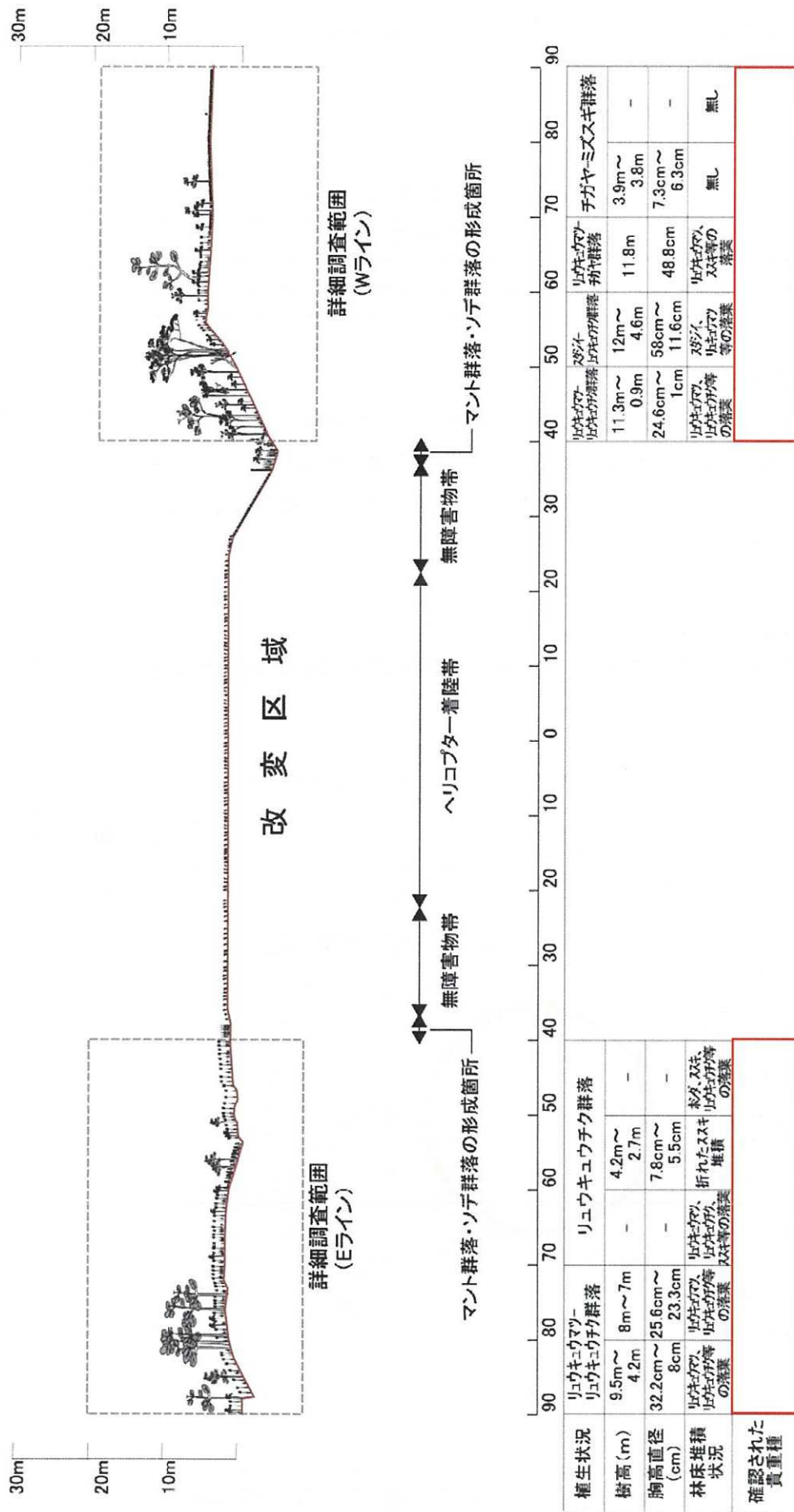


図 6.2.2-15(4) 影響範囲 50m 内の植生断面模式図(東側-西側)：平成 25 年度冬季(N-4.1)

4) 早期緑化帯における植栽種の生育・形成状況

(1) 調査期間

本調査の実施期間を表 6.2.2-10 に示した。

表 6.2.2-10 調査期間一覧(N-4.1)

調査年月日
平成 25 年 4 月 24 日、平成 25 年 9 月 26 日、平成 25 年 11 月 15 日、平成 26 年 1 月 17 日

(2) 調査方法

調査は、マント群落・ソデ群落形成地(樹木剪定及びリュウキュウチク移植地)と無障害物帯(樹木伐採地及びチガヤ移植予定地)において調査を実施した。調査は着陸帯中央から概ね東(南東)・西・南・北側に設けた代表8枠(各1.5m×3m)で調査を行った。

(3) 調査地点

早期緑化帯であるマント群落・ソデ群落の形成箇所、無障害物帯の調査地点は図 6.2.2-16 に示した。

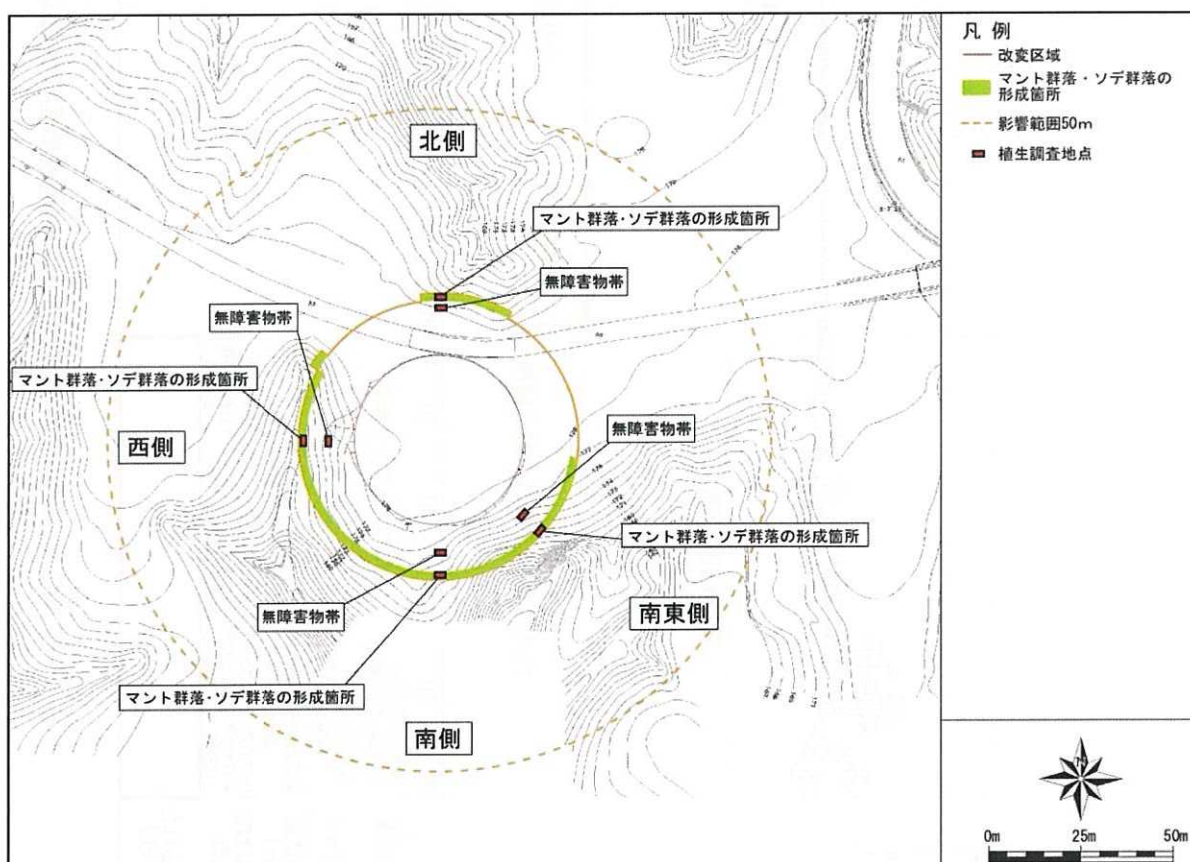


図 6.2.2-16 マント群落・ソデ群落等の植物種の生育状況調査地点(N-4.1)

(4) 調査結果

a) マント群落・ソデ群落の生育状況

マント群落・ソデ群落形成地の植生調査結果を表 6.2.2-11 に示し、方位別の植物の生育状況の推移状況を図 6.2.2-17～図 6.2.2-20 に整理した。なお、調査結果には、過年度結果についても掲載し、植生の推移を分かるようにした。以下に、各地点の植生状況の変化を示した。

北側は、昨年度の最後の調査(平成 25 年 1 月)では、草丈 1.5m、植被率 80%、出現種 22 種であった。平成 25 年 4 月から平成 26 年 1 月までの変化は、草丈が 1.7m と変わらず、植被率が 80% から 90%、出現種は 21 種から 18 種へと変化した。平成 26 年 1 月の段階では、草本類のススキやリュウキュウバライチゴが優占しており、木本類ではサキシマフヨウやシマイズセンリョウ等が生育していた。

南東側は、昨年度の最後の調査(平成 25 年 1 月)では、草丈 1.5m、植被率 95%、出現種 18 種であった。平成 25 年 4 月から平成 26 年 1 月までの変化は、草丈が 1.7m から 1.8m、植被率が 95% から 100%、出現種は 23 種から 18 種へと変化した。平成 26 年 1 月の段階では、草本類のススキが優占しており、木本類ではシロダモ等が生育していた。

南側は、昨年度の最後の調査(平成 25 年 1 月)で低木層と草本層の分化がみられ、低木層の高さが 2.0m、植被率 3%、出現種 1 種、草本層の高さ 1.2m、植被率 40%、出現種 34 種となっていた。平成 25 年 4 月の調査まで 2 階層の分化がみられていたが、同年 9 月から草本層の 1 階層に取り込まれ、平成 26 年 1 月に草丈 1.7m、植被率 90%、出現種 36 種と高さ及び緑量ともに増加した。草本類のススキやコゴメスゲが優占しており、木本類ではフカノキやショウベンノキ等が生育していた。

西側は、昨年度の最後の調査(平成 25 年 1 月)で低木層の高さが 2.0m、植被率 20%、出現種 9 種、草本層の高さが 1.3m、植被率 60%、出現種 27 種となっていた。平成 25 年 4 月から平成 26 年 1 月までの変化は、低木層の高さが 2.0m から 3.0m、植被率が 30% から 75%、出現種が 9 種から 6 種、草本層の高さが 1.5m で推移、植被率が 70% から 30% と上木層へ移行、出現種も 34 種から 31 種となった。ホソバムクイヌビワやホルトノキ等の木本類の生育がみられ、他の地点に比べて最も早く樹林地への遷移(マント群落の形成)が進行しているものと考えられた。

